

石垣島・波照間島のボーダーツーリズム

齊藤マサヨシ

私たちを乗せたバスは、燦々と降り注ぐ日差しの中、バナナ岳の坂道を上っている。

11月も半ばを過ぎているのに石垣島の外気温は29℃まだ真夏の気分だ。バスの中はクーラーが唸りをあげている。私は前日、雪が降りしきる稚内空港を飛び立って石垣島にやって来た。今、本当に日本列島は南北に長いということを体感している。

11月19日 JIBSN 竹富セミナー2022 が午後から石垣島で開催される。コロナ禍で対面での開催は3年ぶりとなる。あわせて石垣島・波照間島のボーダーツーリズムも開催されることになった。私はこれに参加するため石垣島にいる。

バスは石垣島南西部にあるバナナ岳（標高230m）にある南の島の展望台に到着した。石垣島をはじめとする八重山諸島は、古くから台湾との深い交流があった。私たちはガイドの松田良孝さんの案内で台湾との交流の証を訪ねようとしている。

松田さんによると、台湾と八重山諸島との交流は双方向で、台湾人が持ち込んだパイン産業や水牛など島に定着したものが多くあるとのことだ。

私たちは台湾出身者が開拓した農地を俯瞰するため、松田さんの案内でらせん状の展望台に上った。雲一つない快晴で西表島、小浜島、黒島、平べったい竹富島など八重山の島々がかっきりと見えた。松田さんが嵩田（たけだ）地区や名蔵（なぐら）地区の方向を指さして、台湾出身者が開拓した農地が多くある所ですと教えてくれた。そこには青々として見るからに豊かな畑が広がっていた。

八重山諸島を望む反対側には石垣空港がある。空港の滑走路脇には日本最古の人骨が発見された遺跡がある。2017年5月19日付けの日本経済新聞は、石垣島の「白保竿根田原洞穴遺跡」で約27000年前と見られる旧石器時代の全身骨格がほぼ残った状態で見つかった。これは国内最古と見られ、重要な発見だと報じていた。



南の島の展望台から見る

台湾そして遙か南につながる海が私たちの眼前に広がっている。私は日本人を形成したルーツの一つがここにあると思っている。南の島の風景を十分に堪能した後、台湾出身者が開拓した農地と八重山諸島を背景に参加者全員で記念撮影した。私たちは展望台を降りて台湾出身者の皆さんが心のより所とした福德廟を訪ねることにした。

私たちはバスを降りて畑の横を通る砂利道を 5 分ほど歩いた。周囲を畑に囲まれた場所に高さ約 3 m ほどで朱色に塗られた廟があった。正面の横看板には「福德廟 石垣島」と書かれている。

福德廟は未だ建設途上のように、一人の職人が周辺整備をしていた。廟の中には 4 体の土地公、いわゆる土地神様が祭られていた。中央に安置されている土地公は豊かな髭を蓄えた精悍な顔つきをしている。台湾などでよく見かける関羽廟の関羽像に似ている。松田さんの説明によると、以前は台湾出身者の方々が持ち回りで祭事を行っていたが、廟を造って一同に会して祭事を行うようにしたとのことであった。



福德廟石垣島

故郷を離れた人々の心の拠り所として福德廟はあるのだと痛感した。最近のコロナ禍やウクライナ戦争から身近な人間関係など合理的には考えられないことが世の中には山ほどある。そんなとき人は信仰に救いを求めるのであろう。土地公がいつもそばにいて自分たちを見守ってくれていると思っただけで、どれだけ心強いことか計り知れない。

私たちは次に名蔵ダムの傍に立っている台湾農業者入植顕彰碑を訪ねた。この顕彰碑は 2012 年 8 月に建立された。碑の左側には水牛のブロンズ像がある。実物の三分の一程度の大きさでとても可愛い。右側には碑文が刻まれた石が立てられている。名蔵ダム公園と一体化してとても良い景観となっている。私たちは碑を囲んで記念撮影をして次へと足を進めた。



台湾農業者入植顕彰碑



三合院風の家の居間

台湾風の暮らしを今に残している家があるという。私たちは松田さんの案内で台湾の三合院の雰囲気を感じさせてくれる家を訪ねた。家主は不在だが中を見ても良いとのこと、松田さんの案内で家の中に入った。中央の横屋は居住スペースで居間には大きな神様が祀られていた。横屋とつながる右側の建物は炊事場と風呂場で、左側の建物は農機具などの保管場所となっている。

る。

松田さんによると台湾人は開拓する際、まずは竹を植えるという。竹は成長が早く、食料にも建築資材にもなるからだという。私はベトナムなど東南アジアを旅行して時に、建物の建築現場で竹を組んで足場になっている光景を思い出した。

予定の見学場所はすべて回った。松田さんはまだ少し時間が残されているというので、パイン産業発祥の地を案内するという。私たちは「合同」と書かれたバス停の前でバスを降りた。「合同」は地名ではなく、かつて合同拓殖パイン工場があった場所で、会社名がバス停になったという。バス停からさとうきび畑を緩やかに下ったところに石碑があった。「日本パイン産業発祥の地 合同拓殖パイン工場跡」と書かれている。松田さんは本当にここが日本のパイン産業発祥の地かどうか定かではないとの説明であった。しかし、私は日本のパイン産業の先駆的な場所であったということに違いないと思った。これで「石垣島で台湾を歩く」ツアー日程は終了した。午後からは竹富セミナー2022「危機のなかの境界地域」と題してパネルディスカッションが行われた。

次の日も朝から石垣島の空は晴れている。私たち最南端の有人離島である波照間島行きの船を石垣港のターミナルで待っている。私にとって波照間島は初めてで、自分の目で見て体感できることにわくわくしている。午前8時、私たちを乗せた波照間島行き的高速船が出港した。波は低く、船酔いの心配もなさそうだ。船は80分ほどで波照間島の港に到着した。そこには石垣島とは違うもっと南国の島という空気感が漂っていた。



波照間港

私たちは2台のバスに分乗して島内を回ることにした。

最初に訪ねるのは波照間空港である。バスはさとうきび畑の中を走っている。畑の向こ

うには西表島が青々とした姿を見せている。間もなく波照間空港に着いた。オレンジ色の屋根瓦と白い壁の空港ビルは南国の日差しに輝いている。2015年に建て替えられた平屋の建物で真新しい。

波照間空港は2008年11月に石垣空港からの定期便が運休して以来、定期便は運航していない。空港職員は常駐していて施設内を案内してくれた。説明では滑走路は800mで緊急



波照間空港

時など時々使用されるが、早く定期便が就航して欲しいとの強い思いを感じた。

私は空から八重山の美しい海を俯瞰するだけでも価値があると思う。定期便が就航した時には再度波照間島を訪ねようと思った。

ここから2台のバスは別行動になる。一周14kmほどの島に約500人が暮らしている波照間島ではインフラが限られている。30人以上の人間が一カ所に集中するとパニック状態になってしまう。そんなことで2グループに分かれての行動となった。

私を乗せたバスは島の南側にある高那崎に向かっている。途中、円筒形の建物が目立つ星空観察タワーに立ち寄った。現在は不定期開館で、この日は休館していた。

バスは「日本最南端之碑」が立つ公園に到着した。もちろん日本最南端の島は沖ノ島だが、有人離島としては波照間島になる。人の背丈ほどの碑は、1970年代に島を訪れた学生が自費で作ったという。この「日本最南端之碑」に行く手前には「日本最南端平和の碑」というものもある。こちらは行政が建てたとのことである。

やはり人は皆、最南端、最北端などのボーダーに心惹かれる。とくに最北端に住む私にとってこの地は格別の想いである。地球は丸いと知っていても何故か端っこに憧れる。7年ほど前に都内のホテルを予約していたら何かの手違いで部屋が埋まっていた。その時案内



日本最南端之碑

されたのが特別スイートルームで、4部屋もあって身の置き場所に困った経験がある。結局一番狭い部屋の隅っこで寝た記憶がある。私の場合、やはり端っこや隅っこが落ち着く。子供たちのあいだで「すみっコぐらし」のキャラクターが人気を呼んでいる。ほんわかしたキャラクターは子供

たちの心を慰めてくれるのであろう。



ニシ浜

店前のベンチに腰掛けて食べ始めた。それが島の景観にぴったり馴染んでいるのが何ともおかしかった。

共同売店の近くの道沿いに「記念物 アカハチ誕生の地」と刻まれた石碑が立っていた。横に碑文があって八重山の英傑オヤケアカハチが生まれた



オヤケアカハチ誕生の地

バスはニシ浜に到着した。

日本最南端之碑があった高那崎は荒々しい岩場の海岸であったが、ニシ浜は白い砂浜が広がる海岸で対照的な景観を見せてくれる。真っ白な砂浜の向こうにはエメラルドグリーンの海がどこまでも続いている。この日は快晴、ハテルマブルーの空が眩しかった。この海を見ているとどうしても泳ぎたくなってしまふ。私たちのグループの一人が用意した水着を着用して泳ぎ始めた。どうですかと聞くと「とっても気持ちいいよ！」と答えてくれた。私たちはニシ浜を後にした。

島の共同売店を訪ねた。島で暮らす人々にとって共同売店は生活基盤の一つである。店内は狭いが食料品から衣類、雑貨、お土産品など豊富な品揃いだ。一人がアイスクリームを買って、



共同売店

跡とあった。後で調べるとオヤケアカハチは15世紀末の波照間島に生まれて豪傑で、波照間島に攻め入って来た琉球軍に果敢に立ち向かった人物ということらしい。

与那国島には女傑サンアイソバの碑がある。

サンアイソバも外敵から島を守った英雄として伝えられている。当時の八重山諸島の島民にとって、最も恐ろしいのは外から疫病が持ち込まれることであった。もし疫病が流行すると全島民が消滅しかねない。外敵から身を挺して防御することは、現在の新型コロナウイルス対策に共通するものがあったのだと思う。

共同売店を出た私たちは島の中心部をぶらり歩きすることにした。道脇にはバナナの木があって青いバナナ房を付けていた。道路を歩くと汚水のマンホール蓋があった。デザインが南十字星で蓋いっぱいに星が散りばめられている。交差する道路の角の家には魔除けの石敢當があった。間もなくして最南端の郵便局に到着した。本当は記念スタンプが欲しかったが、今日は日曜日で閉まっていたのが残念であった。

波照間島には泡盛をつくる酒造所がある。この酒造所でつくるのは「泡波」だけで、数量も限られているため、ほとんどが島内で消費されるため、島外に出回ることが少ない。このため、幻の酒ともよばれている。私もお土産に 360ml ボトル 1 本を買って求めた。

島内を足早に巡って、気がつくとお昼の時間となっていた。

「あがん」という島の香りが漂う食堂で昼食となった。ソーキそばとジューシー（炊き込みご飯）にサラダとモズク酢の献立はとても気に入った。私はデザートに黒糖アイスクリームを注文した。口の中で甘くひんやりとろける感覚は、外の暑さと相まって朝からの疲れを癒してくれた。昼食を終えると帰りの船の時刻が迫っていた。私たちはバスに乗り込んで波照間港へと向かった。



泡波の販売店



南十字星のマンホール蓋

駆け足で巡った波照間島観光は終わった。まだ行きたいところはたくさんある。南十字星が輝く星空は是非とも見たいし撮影したい。再訪することを誓って石垣港行き的高速船に乗り込んだ。日本最南端の有人離島である波照間島には南国の太陽が惜しげもなく降り注いでいた。